主権国家への「介入」討議

「病気の進行阻む処置は不可欠」
「必要な介入こそ今世紀の教訓」

フランスの「全世界文化アカデミー」から一冊の新刊書が届いた。国際社会が抱える難題「介入」をテーマに、二日間論議を重ねた大規模なフォーラムの記録だ。世界から集まった発言者は、ノーベル賞受賞者からボスニアに派遣された軍人まで、各分野の専門家、有識者六十六人。ある主権国家で、非人道的な出来事が起きた場合、国際社会は放然と介入すべきだとする強い主張が大勢だった。その根底には、愚部は外科手術で取り除くべきだとする西洋医学の考え方と、国家の存立より人道的な正義感を重視する価値判断がうかがえる。主な発言を紹介し、わが国の「国際貢献」論議の参考に供した。

平野　新介
（編集委員）

同アカデミーは、アウシュビッツ強制収容所生き残りのノーベル平和賞受賞作家エリー・ウィーゼル氏を会長に、昨年パリで設立された。あらゆる不寛容や差別に反対し、二十一世紀に向けて絶対文化の平和的融合をめざす九三年一月八日付本紙朝刊（座標）参照。そのアカデミーの初事業がパリ大学講堂を満員にしたフォーラムだった。

書名は「介入とは？人間の権利と国家の理由」（クラッセ社）。メディアが発達し、情報が世界を駆けめぐる現代に、知らないというのは言い訳だ。殺人、拷問、死を放置しておくことは、その共犯者に等しい。最も非人間的なのは、かかわり合いを避ける選択、無関心ではないか――との問題提起である。

討論は六部に分かれた。

第一部では、「介入」といえば、まずに倫理と政治などの視点が及んだ。

仏フォーラムの記録を刊行

ソマリア・モガディシオでイタリア兵にキャンデーをねだる子ども＝93年6月、AP

「無関心は罪」と訴え

動機の背景　国の利害も

第二部は、主に、介入を正当化する法則、介入が侵略となるぬ政治システムなどをめぐる談論。ポーランド・哲学者のコラコフスキ・シカゴ大教授は「人間は本性上、自分の頭で判断する組織の役割ではない

日本流の論理練るとき

こうして日本は、他国で何が起きようと自らは積極的に語らず動かず、国連や西側諸国の判断に従うようになった。経済大国でも、政治・外交面では「人前扱いされないゆえんである。

発言は多彩だが、おおむね欧米流の論理で歯切れがいい。国際社会の「介入」を正義とする強い信念、けおされる感じもする。

戦後の我が国は、失敗にとりて、他国への介入など考えもしなかった。再建に懸命で他を顧みる余裕もなかったし、国際社会も日本の介入を警戒していた。

自ら判断しないと、情報への自衛隊派遣しかりだ。もちろん、安保理常任理事国になれば、そんなわけにはいかない。自ら情報を仕入れ、自分の頭で判断する独り立ちが必要だ。

フォーラムでは「介入」つ難題なるものと思われているが、歴史的な偶然や戦争の結果として存在している国家には、もん法当然性はない」と区別し、国家の正当性は当面、国連憲章などの国際的認知によるほかない」と現実的に判断する。

フィガロ紙のコラムニスト、アンドレ・フロッサー氏は第一次大戦中、自宅に爆弾が落ち、母の腕と抱かれていた自分の足が傷つけられた。第二次大戦中、人々が生きるしかばねを心に刻んだ。「平和主義者とは、争いから離れ、弱者に対して強者を増長させる人間だ」と言う彼の結論は「いつでも戦争が出来るほど、平和を愛する」。

唯一の日本人、川田順造東京外国語大教授（文化人類学）は、十九世紀モデルの国民国家が世界を覆っていることの不条理を指摘し「これらの人間は、単一の民族や国家へ忠誠を誓うのではなく、それらを超えた複数の多重的アイデンティティーを持つべきだ。国民国家に圧迫され絶滅ひんしている少数民族の代弁者として、国際社会に入することは、このアカデミーのような、個人で構成介入団体の役割だ」と提唱した。

第四部は、赤十字をはじめとする民間団体による人道援助活動が焦点となった。ノルウェーの女優でユニセフ親善大使でもあるリブ・ウルマンさんは、世界各国の難民キャンプを訪問した体験を語る。テレビでよく放映されるひん死の子供たちの惨状にふれ、「孫から、私は何をしたのかと問われた。エチオピアの古老が、エチオピアの古い言葉で、ムクモの巣で捕獲される。だが、それは、しかも平和的に、間断なく介入しているのだから」

「あらゆる情報操作に反対しなければならない。人権侵害はもっと幅広く、あまり絵にならないことでも、注意を払ってほしい。時にはスクープ意識を忘れるべきだ。スクープはメディアの一種利だが、それよりも情報全体の義務が大きい。現代の悲劇に最初に、しかも平和的に、間断なく介入しているのだから」

フランスのベルナール・クシュネル元厚生人道問題担当相は、一九九一年サラエボにいて、ボスニアの悲劇を予想しながら国連軍の予防介入を拒まれた体験を話し、「手遅れにならぬうちに乗り込む――これが若者とともに作り上げる新たな理想だ。大量虐殺を予防しよう」と呼びかけた。

ウィーゼル氏が、「関会の冒頭で「人間はさまざまな権利を持つ。だが我々すべてが認めない権利もある。それは無関心という権利だ」と断じた。少年時代に強制収容所の地獄を体験した人の重い訴えである。

た理由は三つ。米国の世論が、ソマリア内戦がもたらした飢餓のスペクタクルにもろかった。ボスニアより簡単だと思った。そして共和党が選挙民から弱腰と見られたくなかったからだ」と分析した。

メディアの今後に注文

結論の部で、ウンベルト・エーコ氏は「現代文化人類学は、植民地化によって迫害された多数民族に対する西欧の権威を改現した、残れられた人々の権利の再発見に大きな役割を果たした」と評価したのち、メディアに注文をつけた。

「あらゆる情報操作に反対しなければならない。人権侵害はもっと幅広く、あまり絵にならないことでも、注意を払ってほしい。時にはスクープ意識を忘れるべきだ。スクープはメディアの一種利だが、それよりも情報全体の義務が大きい。現代の悲劇に最初に、しかも平和的に、間断なく介入しているのだから」

ヨーロッパでは一九三八年のミュンヘン会談が、弱者の平和外交でナチスの侵略を助長させたとの反省が根強い。フランス法務、外務などの閣外相を歴任したアラン・ジュペ・キージュマン氏は、パールハーバーの悲劇にもふれつつ「必要な介入こそ、二十世紀の教訓だ」と強調した。

第三部では、文化人類学者のアンヌ・チャプマンさんが基本的な問いを出す。コロンブスの新大陸到達以来、ヨーロッパは歴史的にアメリカ大陸の原住民を殺害し、搾取してきた。アメリカの征服と植民地化こそ歴史上最も野蛮な「介入」だったと、重い指摘。

第四部は、赤十字をはじめとする民間団体による人道援助活動が焦点となった。ノルウェーの女優でユニセフ親善大使でもあるリブ・ウルマンさんは、世界各国の難民キャンプを訪問した体験を語る。テレビでよく放映されるひん死の子供たちの惨状にふれ、「孫から、私は何をしたのかと問われた。エチオピアの古老が、エチオピアの古い言葉で、ムクモの巣で捕獲される。だが、それは、しかも平和的に、間断なく介入しているのだから」

「あらゆる情報操作に反対しなければならない。人権侵害はもっと幅広く、あまり絵にならないことでも、注意を払ってほしい。時にはスクープ意識を忘れるべきだ。スクープはメディアの一種利だが、それよりも情報全体の義務が大きい。現代の悲劇に最初に、しかも平和的に、間断なく介入しているのだから」

フランスのベルナール・クシュネル元厚生人道問題担当相は、一九九一年サラエボにいて、ボスニアの悲劇を予想しながら国連軍の予防介入を拒まれた体験を話し、「手遅れにならぬうちに乗り込む――これが若者とともに作り上げる新たな理想だ。大量虐殺を予防しよう」と呼びかけた。

ウィーゼル氏が、「関会の冒頭で「人間はさまざまな権利を持つ。だが我々すべてが認めない権利もある。それは無関心という権利だ」と断じた。少年時代に強制収容所の地獄を体験した人の重い訴えである。

元フランス軍事課長モーリス・シュミット将軍は、テレビに出るたびにクリスマスにわざわざサラエボを訪れるスター気取りの人物として介入動機に反感をあらわにする。

「米国の介入動機は、「米国の利害」だ。それは「どうして」は「なぜ」と、第一歩から自前の論議を重ねることが必要だろう。

ボスニアより簡単だと思った。そして共和党が選挙民から弱腰と見られたくなかったからだ」と分析した。

メディアの今後に注文

結論の部で、ウンベルト・エーコ氏は「現代文化人類学は、植民地化によって迫害された多数民族に対する西欧の権威を改現した、残れられた人々の権利の再発見に大きな役割を果たした」と評価したのち、メディアに注文をつけた。

「あらゆる情報操作に反対しなければならない。人権侵害はもっと幅広く、あまり絵にならないことでも、注意を払ってほしい。時にはスクープ意識を忘れるべきだ。スクープはメディアの一種利だが、それよりも情報全体の義務が大きい。現代の悲劇に最初に、しかも平和的に、間断なく介入しているのだから」

フランスのベルナール・クシュネル元厚生人道問題担当相は、一九九一年サラエボにいて、ボスニアの悲劇を予想しながら国連軍の予防介入を拒まれた体験を話し、「手遅れにならぬうちに乗り込む――これが若者とともに作り上げる新たな理想だ。大量虐殺を予防しよう」と呼びかけた。

ウィーゼル氏が、「関会の冒頭で「人間はさまざまな権利を持つ。だが我々すべてが認めない権利もある。それは無関心という権利だ」と断じた。少年時代に強制収容所の地獄を体験した人の重い訴えである。